

1P83

小中一貫教育の開始前と開始後の同学年の子どものQOLの比較

宮崎 つた子¹、井倉 一政²¹三重県立看護大学²岐阜協立大学

【目的】

本研究は、A県で初めて公立の小中一貫義務教育が行われた地域の開始前の児童と開始後に入学した同学年の児童のquality of life（以下QOL）の変化を明らかにすることを目的とした。

【方法】

対象は、小中一貫義務教育が行われる前の2015年B市C中学校区の小学校3校の3年生（以下開始前の3年生）と4年生、開始後に入学した2019年の3年生（以下開始後の3年生）と4年生である。調査内容は、学年、性別、相談相手、いじめに関する内容、QOL（Kiddo-KINDLR Japanese Version）等で構成した。日本語版子どものQOL尺度は身体的健康、精神的健康、自尊感情、家族、友だち、学校生活の下位尺度から構成されている。研究方法は、開始前と開始後の3年生と4年生の同学年の子どものQOLの総得点と下位尺度の得点計算をし、t検定を行った。

【結果】

対象は、開始前の3年生35人、4年生34人、開始後の3年生35人、4年生32人であった。開始前の3校の3年生と開始後に入学した3年生のQOL得点の比較では、開始後の3年生の方が総QOL得点と下位尺度の自尊感情、友だちの項目が有意に高得点だった。同様に開始前の4年生と開始後に入学した4年生のQOL得点の比較では、開始後の4年生の方が下位尺度の自尊感情、友だちが有意に高得点だった。また、「人の気持ちを大切に出来る人になりたい」の項目で「そう思う」と回答した児童は、開始前の3年生74.3%、開始後の3年生85.7%に、「いじめはどんな理由があってもいけないと思う」の項目で「そう思う」と回答した児童は、開始前の3年生77.1%から開始後の3年生97.1%にポイントが上昇していた。相談相手の項目では、「両親に相談する」「友だちに相談する」「先生に相談する」と回答した児童がいずれも開始前の3年生よりも開始後の3年生の方がポイントが上昇していた。

【考察】

A県の小中一貫義務教育が行われる前の少人数の教育環境の児童と小中一貫義務教育で児童・生徒数の増加した環境の児童のQOL得点の比較から、小中一貫義務教育環境は児童の友達関係や自尊感情、総QOL得点を高める一助になっていた可能性が考えられる。今後も児童数が減少する中で、小中一貫義務教育は、児童のいじめや不登校などの軽減、QOLの向上との関連をみていく必要があると考える。

1P84

被暴力および被虐待経験が大学生の自我の発達に及ぼす影響

林田 りか

長崎県立大学

【目的】

日本での児童虐待に関する児童相談所での相談対応件数は年々、上昇し続け、令和元年の速報値では約20万件に達している。現在でも、親の虐待が原因で児童が死亡する事件は多い。先行研究では、乳幼児をもつ親の虐待認識度や被養育体験等との関連について実施されており、虐待の被体験がその後の発達に関係していることが示唆されている。そこで、本研究では幼児期・学童期に受けた暴力や虐待体験、虐待認識が、青年期までの自我の発達にどのような影響を及ぼすのか明らかにし、教育や医療現場で援助を行う上での一資料とすることを目的とした。

【研究方法】

A大学に在学中の1～4年生236名を対象に、対象者の属性、虐待の認識度、家庭内暴力・虐待経験の有無、青年期の自我発達上の危機状態尺度など調査票を用いて行った。調査期間は2016年7月。調査方法は、講義終了後に研究の目的と倫理的配慮について説明した後、調査票を配布し、記入後にその場で回収した。倫理的配慮として回答は無記名自記式とし、研究の目的・方法、調査への参加は自由意思であり回答や内容によって不利益を被らないこと、データは研究以外には使用せず研究終了後には処分することなどを口頭および書面にて説明した。

【結果および考察】

有効回答数は218名（有効回答率93.2%）であった。虐待について「考えたことがある」者は83.9%であり、特に人格形成に影響があると考えた内容は「心理的虐待」が72.9%、「身体的虐待」38.1%、「ネグレクト」34.9%、「性的虐待」は30.3%であった。全体の3.7%が家庭内で暴力を受けた経験があり、暴力をふるわれる場面は「言うことを聞かなくなった時」60.0%、「時間を守らなかった時」「お酒を飲んでいる時」などがそれぞれ10.0%であった。虐待を受けた経験者も全体の3.7%おり、「身体的虐待」75.0%、「心理的虐待」62.5%が多かった。被暴力や被虐待経験の有無と自我発達上の危機状態尺度との関連では、有意な差はなかった。暴力と虐待を受けた者はいずれも3.7%だったため、同様の場面で起きている可能性が高い。虐待を受けた子どもは、不適切な育児環境により、脳機能への影響として精神障害や機能低下などの特徴があると言われている。今後は、異常の早期発見や、必要であればカウンセリングなどにつなげることが大切である。